

西国巡礼慈悲の道

西国第三十三番

谷汲山

華嚴寺

「納めおく」

山主 久保寺美好

が出来ます。

この笈摺を脱ぐという行為は満願に伴う「精進落とし」であり、それはすなわち宗教的次元での「再生」を意味したものと考えられており、この歌が【未来】を表すのは、そのような意味があつてのことなのかもしれませぬ。

なぜこのお堂にこれほどまでの千羽鶴が奉納されているのかといえますと、元々の笈摺を納めるお堂という意味が、長い歴史のなかで「おいづる」に似た言葉の「おりづる（折り鶴）」と解釈され、奉納されたのがはじまりのようです。

西国霊場中興の祖である花山法皇は三十三所の観音霊場を御巡幸され、その折に各札所で詠まれた歌が御詠歌として今日まで伝わっております。

「万世の」は【過去】、「今までは」は【未来】を表すとされております。

その三首の御詠歌は満願のお寺に相応しく、なかでも「今までは」で始まる御詠歌には、長い間ずっと親のように想い、共に旅してきた笈摺（おいづる）を

さて、当山の本堂に向かつて左奥には笈摺堂というお堂があり、札所を巡り終えた人々の笈摺、納経帳（朱印帳）、菅笠、金剛杖等がうず高く納められており、またお堂の周囲には、沢山の千羽鶴が色とりどり所狭しと奉納されているのに、

このように当山には笈摺はもとより、一羽一羽願いを込めて折られた千羽鶴をはじめ、いく人達の数々の「想い」が納められています。お寺なのです。

花山法皇はその時に当山を西国巡礼結びの地と定められ、満願結願の札所として三首の御詠歌（※裏面記載）を詠まれました。

その御詠歌は現在・過去・未来を表し、「世を照らす」で始まる歌が【現在】、

最終の札所である当山へようやくたどり着いて、満願によせる格別の思いでこの地に納めたという花山法皇の御姿をうかがい知ること

誰かが付かれたのではないのでしょうか。

巡礼の品々はともかく、



西国第三十三番

谷汲山

華嚴寺
けごんじ

天台宗

御本尊／十一面観世音菩薩 開基／豊然上人・大口大領

よをてらす ほとけのしるし ありければ まだともしびも きえぬなりけり
 よろずよの ねがいをここに おさめおく みずはこけより いずるたにくみ
 いままでは おやとたのしみ おいづるを ぬぎておさむる みののたにくみ

観音風光

当山では、春は桜、秋は紅葉の名所として、大勢の参拝客で賑わいます。なかでも二月十八日、そして春と秋のまつりではこの地方に古来より伝わる伝統芸能で岐阜県重要無形民俗文化財第一号に指定されている、約四メートルもの鳳凰の羽をかたどった「シナイ」をくねらせ、胸の太鼓を叩きながら躍る勇壮な「谷汲踊り」が披露されます。

主な年中行事

二月節分の日 節分星祭

二月十八日

五穀豊穰・商売繁盛祈願祭

春（四月第二日曜） 桜祭り

八月十七日夜 十七夜会式

秋（十一月第二日曜） 紅葉祭り

〒501-1311 岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲徳積23

TEL 0585-55-2033 <http://www.kegonji.or.jp>

納経時間 午前8時～午後4時30分

仏教用語一口解説

阿吽とは

インドの文字であるサンスクリット語では、日本の五十音に当る最初の文字が『𑖀(ア)』と口を開いて出す音声で、「物事の始まり・純粹で染まりが無い」という意味、最後は『𑖄(ウン)』と口を閉じて出す音声で、「全てが収まる」という意味の字です。つまり、阿吽はものの始まりと終わり、「出息入息」を示しています。「阿吽の呼吸」とよく言いますが、ここから最初を示せば結果が出るという意味で使われるのです。

西国三十三所札所会ホームページ <http://www.saikoku33.gr.jp>

西国霊場にご参拝の時は納経帳や白衣を忘れずにご持参ください。2回目以降はご参拝の印として重ねて納経印をいただきます。